連載 監査の四季

第1回

鯖江市代表監査委員 川中清司

春よ、予算はまだ蕾（つぼみ）

グレーから若緑へと西山がお色直し。ポプラの小枝が伸びやかに青空に手を振り、進徳小学校の子どもらの声が明るく響いてきます。市役所の窓はいま、春たちの晴れ舞台。

新しい年度。辻市長は3年後の市制50周年を目標に、世界に誇れる国際産業都市や環境国際都市など、多彩な「さばえものがたり」を描きます。

しかし、「すべての事業に対し、ゼロからあらゆる角度で見直す」ために**骨組み予算**とし、6月に本格的に肉付けする方針をとりました。**市町村合併問題**も迫っています。

市の台所はきびしい。一般・特別会計の負債総額は610億円もある。歳入は平成12年度で439億円、そのうち市民負担は税金が89億円、保険料や水道料など合せても136億円だけ。あとは国や県の交付税や補助金ですが、もう今迄のような期待はできません。

財政健全化にむけ「我慢」に挑戦しながら、**ファッションタウン実施計画**167項目を一つずつ実践に移して、市民生活と産業の根っこからの向上を目指しています。市には30を超す課や室などがあり460人の職員が働いています。機構改革もすすめ、いま庁舎の中に緊張感がみなぎります。

監査の仕事は、収支は正しいか、ムダなく機能しているかをチェックし、図面片手に工事現場にも出向きます。監査委員は、増田光氏と私の二人です。4月号から連載でホットな情報をお届けします。

住民の期待が監査のエネルギー。

（鯖江市監査委員事務局ホームページをどうぞ）

庁舎にも春の色